

Tsuda Today

no.

70

index

- p.1 2008年度卒業式式辞
- p.2 2008年度各賞受賞者報告/活動報告
- p.4 インターン報告/ライティングセンター開設
- p.5 創立110周年記念事業/連続講演会のお知らせ
- p.6 女性研究者支援センター報告/オープンスクールより/冊子の紹介等
- p.7 退職挨拶/クリスマス礼拝
- p.8 公開講座等/第10回高校生エッセー・コンテストのお知らせ/2009年度オープンキャンパスのお知らせ

発行日 2009年3月30日
発行 津田塾大学
編集 企画広報課
〒187-8577 東京都小平市津田町2-1-1
☎ 042-342-5113 ☎ 042-342-5121
http://www.tsuda.ac.jp

2008年度卒業式式辞(要旨) 津田塾大学学長 飯野 正子

リーダーシップを発揮して社会に貢献できる女性に

晴れの日を迎えられた卒業生の皆さん、おめでとうございます。在学中の数々の思い出を胸に、今日、津田塾大学を巣立ち、大きな可能性を秘めた空に羽ばたいていかれる皆さんに、そしてこれまで皆さんを支えてこられたご家族のかたがたに、心からお祝い申し上げます。

津田で過ごされた時間は、皆さんの長い人生のなかでは小さな部分かもしれませんが、それにもかかわらず、重要な意味を持つことになるでしょう。そして、その意味を、いま、卒業にあたって考えてみることに意義があると思います。それはすなわち、津田塾大学の教育理念を再確認することであり、私たち教員職員が、皆さんに津田での経験を通して何を学んでいただきたい、どのような意味を見出していいただきたいと願って努力してきたかをお話しすることでもあります。

その一つをお話します。今年度も、本学にとってうれしいことがいくつかありましたが、なかでも本学の理念をいっそう明確にする事業を開始できたことは喜ばしいことでした。まず、「女性研究者支援センター」の設置です。これは、文部科学省が実施している「女性研究者支援モデル育成」事業への申請が採択され、平成20年度文部科学省科学技術振興調整費を得て設置されたもので、その目標は出産・育児を抱える女性研究者をさらに積極的に支援しつつ、世代連携と文理融合を両輪として次世代研究者を育成することです。また、文部科学省の実施する「質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)」に、本学の取組が二つ——「専門課程における英語カリキュラム協調開発」と「社会貢献は書く力とプロジェクト推進力から」——採択されました。

こうした取組が社会にも認められたこと自体、本学にとっては大きな励みですが、それ以上に誇らしいことは、認められたこれらの取り組みが、いずれも、津田梅子先生が本学の前身「女子英学塾」創設にあたって掲げておられた理念——リーダーシップを発揮して社会に貢献できる女性を育む——を具体化したものだということです。建学の理念は、いまでも本学のバックボーンとしてしっかりと根をおろしているのです。本学のかざす灯火は、建学以来、揺らぐことなく今に至っているのです。

最近、リーダーシップについて論じる著作がよく目に留まります。ジョセフ・ナイ氏の著書『リーダーパワー』やロバート・グリーンリーフ氏の『サーバント・リーダーシップ』をお読みになったかたも多いことでしょう。混沌とした時代だからこそ、よきリーダーが求められ、よきリーダーについての議論が盛んになっているのだとも言われます。そんなとき、100年以上も前から「自立した女性」、「リーダーシップを発揮できる女性」の育成を謳った本学の理念が、いっそう輝きを増しているように思われます。リーダーの資質のなかでも、上記の本に書かれている「状況を把握する知性」(contextual intelligence)は、まさに、津田先生の時代から本学で学ぶ学生の皆さんに身につけていただきたいと願ってきた、自主的な思考力、判断力、適応力、発想の転換をする力などを指していると考えられます。

津田先生がこのような理念を持って女子教育に尽くす決心をされたきっかけの一つは1889年のプリンマー大学への留学でした。その留学時代の経

験を語った談話がエッセイとして残っていますが、その冒頭に次の文があります。

「われ・・・プリンマー女子大学に在りて深く感じたは、彼の国女学生が能く自治の心に富みてみづから其の身を修むること・・・」(米国女学生の美風)『姫百合』1899年。『津田梅子文書』に所収。

つまり、学生の自治の意識や行動に感銘を受けたことを語っておられるのであり、この経験が本学の建学の理念である自立の精神に生きていることは明らかです。しっかりとした倫理観を持って自らを律し、自主的に考える力を持つことが、リーダーシップを培う基盤です。言い方を変えると、リーダーシップを発揮して社会に貢献するためには、自分の力で考え、判断することが前提なのです。

皆さんの前を歩む輝かしい先輩たちが常にそうであったように、本学で培ってきた基礎的な学力、専門分野の知識、そして自主的に考える力を基盤に、リーダーシップを大いに発揮して、これからの社会に役立つ人になってください。社会に役立つとはどういうことなのか、ご自分で考え、津田塾大学の卒業生であることに誇りを持って、前進してください。この姿勢こそ、津田塾大学のDNAです。「津田スピリット」なのです。

津田先生の言葉、「受けた教育の価値が認められ、尊敬に値する人になるよう努力してください。そして多くを受け取った者は多くを他人に与えなければならないことを覚えていてください。」(1915年の卒業式式辞)を、私も皆さんに贈ります。人生のどこかで岐路に立ったときには、本学で学んだことを思い起こし、判断の基準に役立ててください。

本学は、2010年に創立110周年を迎えます。つまり本学は110年の歴史を持つのですが、大学の真の歴史は、そこで学んだ者がどう育ち、その後どう生きたかにあるのです。その意味で、皆さんお一人おひとりが、これから津田の歴史を作ってくださいることを、大いに期待しております。

皆さんの洋々たる前途に幸多かれとお祈りいたします。

2008年度 卒業・修了(終了)者数

(2009年3月11日現在)

学部			大学院		修士課程	後期博士課程
	英文学科	255人		文学研究科	7人	(2人)
	国際関係学科	247人		国際関係学研学科	3人	(1人)
	情報数理科学科	107人		理学研究科	4人	(—)

2008年度各賞受賞者報告

16名の学生に各賞が授与されました(敬称略)

ド・フォード賞

優秀な卒業論文を書いた英文学科4年生に授与

■ 英文学科4年 大熊 慧子／立石 みずほ

星野あい賞

成績優秀な情報数理科学科4年生に授与

■ 情報数理科学科4年 中村 典子／松岡 晶子

藤田たき賞

優秀な論文(英文)を書いた国際関係学科4年生に授与

■ 国際関係学科4年 荘野 瑛李子

石坂泰三賞

大学院に進学し、かつ成績優秀な英文学科4年生に授与

■ 英文学科4年 半田 裕紀子／平尾 麻由子／堀口 陽子

成績優秀な情報数理科学科4年生に授与

■ 情報数理科学科4年 東 真美菜／鈴木 沙也香

成績優秀で、よい論文を書いた国際関係学科4年生に授与

■ 国際関係学科4年 今泉 紫央里／坂野上 尚子／下居 知世

市河三喜賞(三席)

英語で書かれた優秀な論文、創作、翻訳、エッセー等に授与

■ 文学研究科後期博士課程2年 髙原 真智



▲市河三喜賞授与式(2008.12.10)

情報科学卒業論文賞

優秀な卒業研究を行った情報数理科学科(情報コース)4年生に授与

■ 情報数理科学科4年 古田土 真希／山本 有希恵

「携帯電話を利用した授業内アンケートシステム」

■ 情報数理科学科4年 佐田 佳奈美／清水 美希／吉田 佳代

「SKYコード～3色を用いた線形コード規格の提案～」

■ 情報数理科学科4年 鈴木 沙也香／辰野 真実

「人の流れのシミュレーションの研究」

多文化・国際協力コース賞

優秀なフィールドワーク報告論文を書いた

多文化・国際協力コース4年生に授与

■ 英文学科4年 矢吹 朱紗美

■ 国際関係学科4年 安田 まさ子



▲各賞授与式(2009.3.10)



▲情報科学卒業論文賞授与式(2009.3.10)

活動報告

通訳コースの学び

これまでも国際的な舞台で活躍する多くの翻訳者や通訳者を輩出してきた英文学科では、3・4年生を対象に、副専攻として、「翻訳コース・通訳コース」を設けています。この度、通訳コース4年生の小池真由さんが昨年12月に名古屋外国語大学にて開催された「第2回学生通訳コンテスト」に出場し、準優勝という見事な成績を収められました。小池さんにコンテストでの経験と、通訳コースでの学びについて報告してもらいました。

英文学科 小池 真由

話し手と聞き手の架け橋に

通訳コンテストでは、日本語スピーカーと英語スピーカーの発言をそれぞれ日英・英日で逐次通訳し、訳の正確さ・スピードなど様々な観点からスキルを競います。今回のコンテストのテーマは「多文化主義」。トピックは多文化主義の定義から在日外国人の人権、今後の課題に至るまで広い範囲に及び、難解な法律用語も含んでいたために大変苦労しました。しかしながら、海外の教育事情や日本における不法滞在者の現状などを知る良い機会となりました。さらに、コンテストで出会った全国各地の大学からの出場者とは、情報交換をしたり勉強方法についてアドバイスをもらったりと、今もおお多くの刺激を受けています。

通訳コースでは、このようなコンテスト出場以外にも学内講演の通訳など、様々な経験をする事が出来ました。中でも印象に残っているのは、アカデミー賞受賞監督であるスティーブン・オカザキ氏の来日記念講演です。授業以外での初めての通訳経験であったことに加え、聴衆の多さに手が震えるほど緊張したことを覚えています。監督の個人的な体験談を交え作品の制作経緯が語られたこの講演の通訳では、作品に関する知識に加え、監督の経歴や史実など関連する分野についての造詣の深さや事前の備えがいかに大切であるかを

感することが出来ました。このために、日頃からCNNを見たり、英字新聞を音読し、新しい情報の収集に努めています。

また、授業では通訳訓練に加えて、自らの訳を録音して分析したり、他の履修生の発言を通訳して、互いに良い点や悪い点を指摘し合うことにも励みました。自らが聞き手や話し手になることによって、単に通訳者としての立場からだけではなく、聞き手や話し手の意図を意識した通訳を心がける訓練になりました。このような日頃のコースの仲間との妥協のない切磋琢磨は、豊富なボキャブラリーに形を変えて通訳の実践の場で活かされていきました。通訳コースでの勉強を通じて、異なる言語や文化を背景とする話し手と聞き手の懸け橋となることにさらに魅力を感じています。今後も、このような通訳翻訳に関する興味・関心を追求し、大学院では訳者が読者の異文化理解に与える影響について研究したいと考えています。



講演会での通訳の様子

活動報告

メディアスタディーズ・コースの学び

英文学科准教授 坂上 香

2008年4月、メディアスタディーズ・コースがスタートし、意欲満ちあふれる第一期生を迎えました。「言葉、IT、批判」の力の獲得を目指し、学科の枠を取りはらい、3年次からの2年間でメディアの「理論」と「実践」を同時に学ぼうというchallenging（欲張りで果敢）なコースです。08年度は、3つの学科から31名が集まりました。今回は、1年目の様子を中心に、本コースについてご紹介します。

まず3年次には、映像とウェブを半期ずつ学び、作品を制作します。私が担当する映像篇の課題は、グループで短編ドキュメンタリーを作ること。撮影や編集の基礎技術を習得しながら、翻訳字幕にも挑戦し、同時に、企画の立て方や構成の仕方学びます。リサーチを行ってテーマを決め、実際にフィールドに出かけ、他者と出会い、揺れ動きながら、被写体にカメラを向ける。そして編集した作品を通して、それぞれの世界（観）を投げかけあう。まさに、メディア実践の醍醐味といえるでしょう。

第一期生が取り組んだテーマは、公共の場と表現、留学生が見た日本、小平市の町おこし、働く母親とその環境、学内保育所と大学生、社会人の生きがい、大学生と国際協力、ある女子高生、高齢者福祉としての化粧、デートDV、と実に多彩です。試写やディスカッションを繰り返すことで、テーマや表現方法を深めることはもちろん、制作者としての責任や表現がもたらす効果など、表現そのものについても考えさせられた、と学生たちは言います。

この他、年間を通した理論系のゼミや、メディアに特化した英語の授業など、

言葉と批評力を高めることにも力を入れています。4年次には従来型の卒業論文の他に、卒業制作も選択できるため、3年次で取り組んだ映像／ウェブによる研究を、さらに深めることも可能です。

さらに本コースでは、作品を作って終了、という自己完結型ではない「開かれた学び」を目指しています。そのため、学内上映・作品発表会の他、メディア関連の公開連続講演会や各種イベント、他大学との合宿やインターカレッジ映像研究会等の外部交流の機会も積極的に作っています。また、こうした場の全過程が教育にあたると考え、準備から運営に至るまで、学生と教員が共同で作業を行っています。

本コースはまだ産声をあげたばかりで、試行錯誤の連続ですが、それだけに、学生の間には、自ら新しい道を切り開いていこうとするフロンティア精神がみなぎっています。09年度は全学科から30名が新たに加わります。皆さんも、本コースの関連イベントにぜひ足をお運びください。きっと、津田スピリッツの新しいカタチを感じ取っていただけたと思います。

国際関係学科3年 堂園 かな子

自らの視点で「伝え」、思いを「共有」

メディアスタディーズ・コースでの1年間を終えて、本当に充実した毎日だったと感じています。この1年で素晴らしい仲間と多くの経験を積んできました。

その中の一つ、連続講演会もコースの学生が中心となって行っており、私は坂上先生が監督をされたドキュメンタリー映画『LIFERS』の講演会を担当しました。この映画制作に携わったスタッフの方々をお迎えして、上映会のあとにパネルディスカッションを行うというもので、講演会の2ヶ月前から担当メンバーで話し合いを重ね、講演会の進行や役割分担、広報など具体的なイメージを膨らませていきました。宣伝用のウェブも立ち上げ、そして迎えた当日、『LIFERS』のスタッフの方々との関係者のご協力のおかげで、無事に講演会を終えることができました。

パネルディスカッションでは、映画を観ただけではわからないスタッフの方々の苦労や、映画に懸ける思いを知ることが出来ました。自分の過去があるからこそここに生きていることができ、未来へと希望が続いていく。映画に込められたメッセージに動かされたのは、私たちも同様でした。講演会を作り上げていくのは簡単なことではありませんでしたが、参加してくださった方に何かを感じてほしい、という思いで講演会の運営に取り組み、大きな成果を得ることが出来たと思います。

メディアスタディーズ・コースは自らの視点で「伝え」、そして感じたことを「共有」して学びを深めるコースだと思います。その方法としてドキュメンタリー制作やウェブ制作、講演会の運営、プレゼンテーションの練習などに挑戦してきました。このコースで得たものは、私たちの感性をより豊かにして、これから様々な人間関係のなかで生きていくうえで大きな糧となると思います。



国際関係学科3年 林 知穂

映像制作を通して考えたデートDV

「今この映像を見ることができてよかったよ、おつかれさま。」初めての映像制作で何よりも嬉しかったのは、上映会で友人から言われたこの言葉です。

私たちのグループは、半期をかけて「デートDV」についての短編ドキュメンタリーを制作しました。企画時に、恋人間のDV（ドメスティック・バイオレンス）、いわゆる「デートDV」を扱ったドラマが話題となっていたこと、このドラマの脚本監修をされた中島幸子さん（DV被害者支援の専門家）を紹介する記事が新聞に出ていたことがきっかけで、デートDVに関するドキュメンタリーを制作したいと思うようになりました。

しかし、当初は何を取材すればいいのかわかりませんでした。講演会に顔を出すなどして調査を進めるうちに、元DV被害者でもある中島さん自身のお話を紹介したいと思うようになりました。中島さんには取材を快く引き受けていただいたものの、なかなかテーマが絞れません。結局、「言葉の暴力」に焦点をあてることにしたのは、もう一人の主人公との出会いでした。

それは、恋人からのデートDVの被害経験を持つ、本学の先輩Aさんです。友人から紹介してもらい、撮影前に何度か学食でご飯を食べながら、互いに色々な話をする中で信頼関係を築きました。被害について話をしてくれる人を探すだけでも大変でしたが、Aさんは「これ以上、私みたいに傷つく人が出て欲しくない」とカメラの前に自らをさらけ出し、辛い経験を率直に話してくれたのでした。Aさんの穏やかな表情と語り口からは、デートDVの深刻さがありありと伝わってきて、胸が締め付けられる思いがしました。

撮影の次に待ち受けていたのは、編集作業。大学の授業でここまで本格的なグループ作業は初めてでしたが、限られた時間の中でも、それぞれの得意分野をうまく活かし、協力しあうことができたと思います。撮影も編集作業も悩むことばかりでしたが、その度に話し合い、坂上先生の指導を仰ぎながら、なんとか完成させることが出来ました。他のグループの仲間とも各々の作品についてアドバイスをしあうことで、メディアスタディーズ・コースの一体感も生まれたと思います。技術が不十分で拙い作品ではありますが、学内外で見てもらえたうに、「見ることが出来てよかった」と言ってもらえたのは本当に嬉しく、身をもって「映像」という伝えるツールのパワーを再確認することができました。



活動報告

インターンシッププログラムに参加して

日EU間の産業協力を深める目的で設立された日欧産業協力センターでは、日本とEUの理工系学生を対象に、語学研修と企業研修を行うプログラムを実施し、将来の日EUの架け橋となる人材の育成をめざしています。このプログラムに参加された情報数理科学科の曾根原さんに、EU企業での研修や海外生活の貴重な体験を報告してもらいました。

情報数理科学科4年 曾根原 愛理

EUで学んだ一年間—技術者として、日本人として、女性として

私は4ヶ月間の語学研修（英語・オランダ語）を経て、8ヶ月間ベルギーで企業研修を体験しました。この一年間で見たもの、学んだこと、感じたことすべてが新鮮で、母国日本を客観的に見るきっかけになったと同時に、今後のビジョンや目標が明確になりました。

私の研修先は、画像処理式交通検知システムを製造、販売している企業でした。画像処理式交通検知システムとは、高速道路や一般道にカメラを設置し、カメラからの画像をアルゴリズムを用いて解析、分析するシステムです。このシステムによって車両速度、車種、車両数の他、交通事故などの突発事象を検知し、渋滞回避、交通事故防止、事故後の迅速な対応や検証、交通違反の検挙をスムーズに行うことが可能となります。この製品は精度が高く、EU諸国を始め世界各国で実績があり、日本の企業にも自信を持って薦められる製品なのですが、外国のメーカーであるために思うように信頼を得られず、言葉や文化が大きな壁となって進出を阻んでいる状況がありました。私はそのような企業で、日本企業向けパンフレットやマニュアルの作成、展示会の準備や、ソフトウェアのローカライジングを担当しました。製品の良さを分かってもらうために、私がまず最初に取り組んだことは日本語の公式パンフレットの作成でした。従来、展示会には英語版のパンフレットを用意していましたが、現地地のお客様の反応から、日本語のパンフレットが必要不可欠だと感じたのです。実際に東京で行われた道路交通関係者が集まるイベントに同行し、製品の説明やPR活動を行い、日本企業との会議にも出席する機会もいただきました。このイベントを通して企画の立ち上げから実行にまで関わり、営業、翻訳、通訳、と一度に多くの貴重な経験を得ることができました。

その他、仕事以外では、日本のことを知ってもらうために食事の時にお箸を使ったり、簡単な会話表現を掲示したり、簡単な料理を作って紹介したり、その

レシピをオランダ語で書いて配ったりという工夫をして、周囲とのコミュニケーションを図りました。小さなことですが、お互いの国に興味を抱いて相互理解を深めることが、異なる文化が共存する第一歩だと思っています。今回のインターンシップの体験を通して、海外の人たちと上手に共存できるエキスパートになりたいという思いを、より一層強めました。日本の文化や習慣を世界へ発信しつつ、諸外国の良き技術を柔軟に取り入れて発展することが出来るように、私が架け橋となって日本と海外を繋げていきたいです。また、海外で初めての一人暮らしを通して、働きながら子供を育てる女性の大変さがイメージ出来るようになりました。女性に対する配慮が細かく、家族を大切にするEU諸国の例を基に、日本の女性が働きやすく、子供を育て易い環境を作ることも私にとっての課題です。

最後に、選考書類の添削をはじめ、津田塾の先生方には大変お世話になりました。この場を借りて、改めて御礼を申し上げます。また、在学中・滞在中、大学の友達には色々な面で支えてもらいました。多くの人に支えられて今の自分がいます。これからも、この気持ちを忘れずに、目標に向かって頑張っていきます。



インターンシッププログラムの概要はこちら

日欧産業協力センター

<http://www.eu-japan.gr.jp/japanese/student/japan/index.cfm>

平成20年度文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」採択事業

ライティングセンター開設

津田梅子記念交流館の一角に2008年11月、ライティングセンターが誕生しました。運営母体の「キャリア教育推進タスクフォース」のもと、特任教授の大原悦子、山内恵、事務担当の福島たかね、露木東、チューターで大学院生の橋生子、真嶋麻子という体制で活動を始めています。

ライティングセンターは学生が「書く」ことで迷ったり、悩んだりしたときに相談に応じる支援機関です。授業の課題やレポートなどにも対応しますが、添削は行いません。チューターとの話し合いのなかで、学生自らが問題点や修正法を見つけていくようにし、「自律性のある書き手」を育てます。

優れた読み手を提供するだけでなく、書く力を磨くための講演会や講座も開催します。

例えば「書くということと私」連続講演会。昨年12月には本学出身のジャーナリスト4人を迎え、キックオフシンポジウムを開きました。2009年度は作家や歌人、企業の広報担当者らさまざまな分野の講師を招き、「書く」ことをめぐる苦勞や喜び、仕事や人生観などを語ってもらいます。

「日本語ライティング講座」は今年度10講座実施。こちらも多彩な講師陣が「使える文章表現」「論述の基礎」といった実践的な講座を開きました。少人数（定員15名）ならではのキメの細かい指導が学生に好評でした。2009年度はさらに充実したプログラムを予定しています。

ライティングセンターは平成20年度「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」で採択された「社会貢献は書く力とプロジェクト推進力から」（取組責任者・高橋裕子教授）の一環として設立されました。学生がプロジェクトを企画・推進する「学生主導型プロジェクト」と、日本語力強化を目指すライティングセンターが両輪となって、リーダーシップを発揮できる女性人材を育成します。

日本でライティングセンターを設置している大学はまだ数えるほどしかありません。書く力を養うだけでなく、実践的総合キャリア教育の場としても、本学のライティングセンターは注目されています。



▲上段左より、露木、橋、真嶋 下段左より、福島、山内、大原

創立110周年記念事業ニュース

110th
Anniversary
in 2010

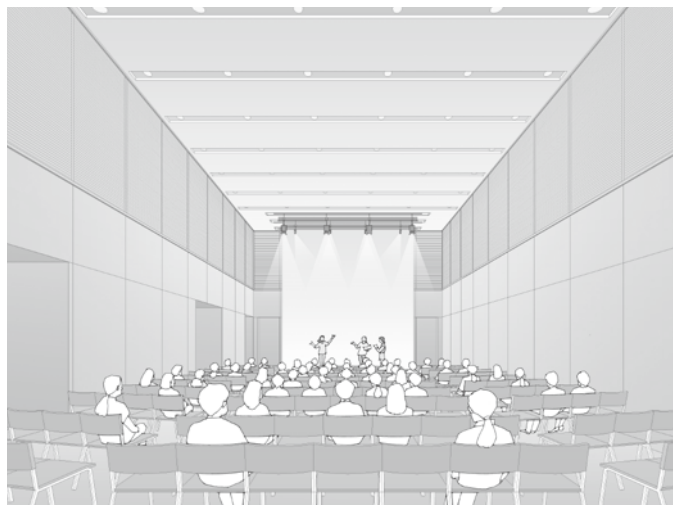
新北校舎（仮称）多目的ホールの概要について

津田塾大学は2010年に創立110周年を迎えます。その記念事業として新北校舎（仮称）と北寮（仮称）の建築、津田梅子及び大学資料のデジタルアーカイブ化、津田梅子賞の創設、小平及び千駄ヶ谷キャンパスの整備を既に決定しています。新北校舎の基本設計については、前号でご紹介しましたが、今回は建物1Fに配置されるホールとその建物を取り巻く自然環境の確保についてご紹介します。

新北校舎の設計は、①歴史あるキャンパスの魅力を継承する②豊かな森を生かす環境づくりをする③キャンパスのコミュニケーション空間を広げるという三つの基本コンセプトに基づいて始まりました。学内から寄せられた意見や要望について検討を重ねた結果、建物1Fに多目的に利用できるホールの設置が実現することになりました。

約200人程度を収容できるこのホールは、 Horizont 幕兼用200インチワイドスクリーン、可動ステージ他、最新のAV機器を備えたものになる予定です。また可動ステージの採用により、縦方向にも横方向にも使えるシアター形式の機能を持たせた設計となっています。会議机や椅子もすべてホールの壁面に設置される倉庫に収納が可能となるほか、舞台裏の倉庫は、楽屋としても使用できる広さが確保されます。マルチメディア化された広いスペースは、プレゼンテーションや演劇、イベント等多目的利用ができる設計となっています。この多目的ホールは、建物の特徴あるスペースの一つとして、今後メディアスタディーズ・コースの授業や演劇を取り入れた授業等での利用が大いに期待されています。

また、この建物の建築に伴い、既存の北庭から建物へ至る東西を貫く通路が設けられ、そこには樹林や花壇が確保されたキャンパスのコミュニケーション空間が広げられる予定です。既存の樹木を極力残しながら、建物東側には創立者津田梅子の墓所へ至る参道の整備も予定されています。梅子への思いをせながら散策のできる自然環境も確保される予定です。今後のスケジュールは、2009年6月に着工、2010年7月に竣工を予定しています。



▲ホールイメージ

創立110周年記念寄付申込状況

(2009年2月27日現在)

募金総数 2,669 件
総 額 116,395,154 円
目 標 額 300,000,000 円

クレジットカードによる寄付が可能となりました。詳細については本学ホームページ (<http://www.tsuda.ac.jp>) をご覧ください。
(ご不明な点は経理課までお問い合わせ下さい)

創立110周年記念事業ニュース

110th
Anniversary
in 2010

創立110周年記念連続講演会を開催

本学は、創立110周年記念事業として連続講演会を開催しております。2007年度はベアテ・シロタ・ゴードン氏（2007年10月7日 於：小平キャンパス）、2008年度は松岡陽子マックレイン氏（2008年5月12日 於：千駄ヶ谷キャンパス）と有馬真喜子氏（2008年10月12日 於：小平キャンパス）を招いて行ないました。2009年度は、読売新聞立川支局との共催で連続市民講座として地域の方々にも広く開放し、年間を通じて講演会を開催します。

テーマは、「津田梅子から110年—グローバルに、そしてローカルに生きる—」

です。ご存知のとおり、先進国の教育で大きな実りを得た津田梅子は、母国の女性の地位を高めることを生涯の使命としました。そのスピリットを受け継いで多方面で活躍する卒業生を輩出している津田塾大学。グローバル化した現代社会において何を学び、考え、伝えていこうとしているのでしょうか。これまでの津田塾大学のあゆみを振り返り、そして現在の津田塾大学が発信している知のエッセンスに触れていただける機会です。是非、ご来場ください。年間のスケジュールおよび講師陣は、以下のとおりです。

2009年度 創立110周年記念連続講演会開催予定（読売新聞立川支局共催）（於：小平キャンパス）

回	月 日	講 師	テ マ
第1回	2009年 4月 18日（土）	学長 飯野 正子	津田梅子とアメリカ — 「女子英学塾」創設の背景
第2回	2009年 5月 9日（土）	国際関係学科 准教授 中山 俊宏	変わるアメリカ、変わらないアメリカ — オバマ政権の行方
第3回	2009年 6月 13日（土）	国際関係学科 教授 加納 弘勝	ビーズと織物から見る世界 — 諸地域を旅して
第4回	2009年 7月 11日（土）	情報科学科 准教授 小舘 亮之	ユビキタス社会の「安全」は守れるか？— 携帯／インターネットは免許制に？
第5回	2009年 9月 19日（土）	数学科 教授 丹羽 敏雄	人生を引き受けるために — そのリズムとパターン
第6回	2009年 10月 10日（土）	英文学科 准教授 マリィ クレア	日本語とジェンダーを再考 — 「おねえキャラ」は「どんだけ」流行るのか
第7回	2009年 11月 14日（土）	英文学科 准教授 坂上 香	「暗い時代」を生き抜くために — 犯罪への眼差しを変える
第8回	2009年 12月 12日（土）	英文学科 教授 高橋 裕子	女性の教育・研究を支援すること — 女性研究者支援センターの事例を中心に
第9回	2010年 1月 9日（土）	英文学科 教授 中西 雅之	コミュニケーションは百業の長!? — 幸せな日常と明るい老後のための「対話力」の磨き方

時間はすべて13：30～15：00 お問い合わせ先 企画広報課 e-mail：kouhou@tsuda.ac.jp

女性研究者支援センター

シンポジウム報告

2008年11月23日(日)に千駄ヶ谷キャンパスにて、シンポジウム「テクノロジー分野で働く女性研究者を考える—日米の事例を中心に」を開催しました。約100名の参加者とともに、日米のテクノロジー分野で働く女性研究者が抱える課題と対策について活発な議論が交わされました。



第1部では久保田誠之総務省審議官、Caroline Simard氏(米国Anita Borg Institute for Women and Technology)、遠山嘉一日本女子大学客員教授をお招きし、グローバル化の中で日本の情報通信分野が直面している課題、米国のテクノロジー分野で働く女性研究者が抱える問題とその対策、また日本の女性研究者の現状と産官学の取り組みについてご講演いただきました。第2部ではSimard氏、遠山教授に、Nathalie Cavaşin氏(早稲田大学)、橋本隆子氏(リコー)、山本里枝子氏(富士通)を加えたパネル討論が行われ、日本企業の女性技術者の支援体制、フランスの女性研究者の支援の取り組み、さらに、日米の類似点と相違点、ポスドク問題などについて意見交換がなされました。

当センターでは、今後もこのようなシンポジウムを開催する予定です。

津田塾大学オープンスクール(千駄ヶ谷キャンパス)

津田塾大学オープンスクールは、大学が培ってきた教育力を生かし、児童、生徒から大学生、社会人まで、幅広い年齢の方を対象とした学びの場を提供するため、2008年4月千駄ヶ谷キャンパスに開設されました。津田塾の特長である少人数教育をオープンスクールでも実現し、さらに優れた講師を選任し講座内容を充実させるため、津田塾大学の教員や学外の専門家をメンバーとしたアドバイザリーボードを設けています。千駄ヶ谷駅徒歩1分という交通の便の良さもあり、児童から社会人まで多くの方が受講しています。また、津田塾生は受講料半額、卒業生は10%割引ということもあり、在学生、卒業生の受講も徐々に増えています。

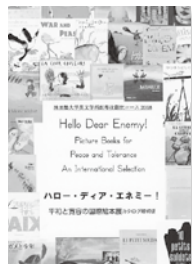
4月からは2009年度講座が始まります。春期講座には、長沼秀世名誉教授による「Seymour M. Lipset, *American Exceptionalism: A Double-Edged Sword*」を読む—アメリカ人の考え方、特徴を考える」、百瀬宏名誉教授をはじめとする研究者による「フィンランド学入門」、情報科学科教員によるIT力を向上する講座「3DアニメーションBlender入門」「JavaScript再発見」など、津田塾大学ならではの講座が数多く開講されます。詳細はWebページで紹介していますので、ぜひご覧ください。

オープンスクールWebページ <http://osc.tsuda.ac.jp>

冊子のご紹介

ハロー・ディア・エネミー！ 平和と寛容の国際絵本展 カタログ増補版

1998年に始まったミュンヘン国際青少年図書館企画、平和と寛容の国際絵本展「ハロー・ディア・エネミー!」。世界が直面する「戦争」に対し、子どもの本を通して「寛容の精神」と戦争の愚かさを知り、「平和の心」を育てることをテーマとした絵本展は80冊のすぐれた絵本とともに世界中を巡回しています。(日本でも2009年4月より巡回予定。詳細は日本国際児童図書評議会 03-5228-0051まで。)



カタログ増補版の翻訳は、英文学科副専攻「翻訳コース」の2008年度受講生が担当しました。世界各国の言語で放たれたメッセージを日本の読者の元へ届けるために役立っています。ミュンヘン国際青少年図書館創始者のレップマンやIBBY(国際児童図書評議会)などのリサーチを加えたA4サイズ53ページの印刷物です。

ご希望の方は企画広報課(042-342-5113)までお問い合わせ下さい。(在庫が無くなり次第、配布を終了いたします。ご了承ください)

理事会・評議員会開催報告

第187回理事会 2008年11月28日

(報告事項)・学長補佐体制について

(審議事項)・津田塾大学学部学則の一部改正に関する件

第188回理事会 2008年12月19日

(懇談事項)・千駄ヶ谷キャンパスについて

・寄附戦略について

・その他(大学の現況および展望など)

ご支援・ご協力に感謝申し上げます

以下のとおり、ご寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。

(2009年2月27日現在)

奨学金として	河端 哲也様	4,000円
奨学金として	津田塾大学同窓会様	425,875円
星野あい賞、藤田たき賞として	久保田 眞苗様	2,000,000円

2009年度も津田塾大学教育振興資金へのご協力をお願い申し上げます。

2009年度 入試結果報告

(2009年3月7日現在)

学部(学芸学部)	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
英文学科	245	2,554	2,320	834
国際関係学科	245	1,966	1,769	848
数学科	45	401	376	162
情報科学科	45	388	350	168
合計	580	5,309	4,815	2,012

大学院(修士課程)	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
文学研究科	15	29	28	20
国際関係学研究科	10	6	6	5
理学研究科	10	12	11	9
合計	35	47	45	34

大学院(後期博士課程)	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
文学研究科	5	5	5	4
国際関係学研究科	3	2	2	2
理学研究科	3	1	1	1
合計	11	8	8	7

※単位は人数。いずれも全入試方式合計数(学部編入学試験を除く)。

三大学コンソーシアムの正式名称が決定

一橋大学、慶應義塾大学と本学の三大学共同提案が欧州委員会の公募に採択されたことにつきましては、Tsuda Today 69号でお知らせいたしましたが、この三大学コンソーシアムの正式名称が次のように決定しました。

The EU Studies Institute in Tokyo (EUSI)

2008年12月1日付で、駐日欧州委員会代表部との正式な契約が取り交わされました。EUSIは、現在(2008年12月から3月)の準備期間を経て、2009年4月から4年間の活動を開始します。

大学を離れるにあたって —2008年度定年退職者からのメッセージ—



英文学科
高桑 美子 先生

津田と私の結びつきは、ずっとずっと昔五十七年前に遡ります。当時十一才だった私は世田谷に住んでいて、一人の津田塾生にすっかり魅せられていたのです。その人は就職活動中でステュワデスの試験を受けていましたが、背が高く美人、何よりも頭の回転が速く、英語がべらべらでした。「私も大きくなったら津田に入ってステュワデスになろう」他愛もなくそう思いました。

大きくなって津田に入りましたが、そこで待ち受けていたのは英語の猛特訓でした。「辞書は引いて引いて引き潰しなさい」英問英答の授業で答が分らず、ようやく憶えた「I'm sorry…」をクラス中が連発していると、「Is there anybody who is not sorry?」日本語の訳も「てにをは」まで注意を受けました。試験の出題は「次の文をよい日本語に直しなさい」

そんな毎日の中で、与えられた教材の文学作品のおもしろさに次第に目覚めていったのです。そして気がついてみると、母校の教壇に立ちイギリス文学史や小説概論、文学特殊講義などという授業をしていました。今年はⅢ年ゼミ来年はⅣ年ゼミとバタバタと暮しているうちに、ほんとうにあっという間に四十年の歳月が流れ、流れた時間の長さに比し為し得たことの少なさに愕然たる思いであります。



英文学科
金谷 展雄 先生

津田に来て37年、時間は均等に流れたのですが、私の中ではそうではありません。はじめの1、2年はずいぶんゆっくりでした。私のほうは、手強いという噂の女子大でどう身を処すべきか、まったくの手探り状態。学生のほうは、まだ30を出たばかりの若造に一体何ができるかと、不信の眼差しを投げかけてくるように見えました。これが誤解と分かるまで、居心地はよくなかったのです。救いは、教職員の方々があたたかな目で私を見ていてくださることでした。そのあたたかさが私にとっては運のつきでしたが。

次の四半世紀。それは嵐のごとく過ぎ行きました。今では一瞬に思えます。私はあつい教職員と一体となったかのように、津田を、特に英文科を、よくしようと心を砕きました。そのために、あるいは手に手を取りあい、あるいは闘いました。疲れは感じませんでした、心理的には。思えば、学生が私を支えてくれたようです。その学生たちは、年々顔こそかわれ、いつも二十歳前後ですから、自分はまるで歳をとらないような、とんでもない錯覚に陥っていました。

そして最後の十年。夢から覚めて現実を見直す年月だったと言えます。自分の病もありましたし、大学の「現状」が変わっていくことがなんだか残念でもありました。よい方向の変化も多かったとはいえ、どんどん競争社会に取り込まれていく空しさも感じました。ある程度の競争は必要でも、どっぴりつかってしまったのは、社会を変革する創造的な視点、エネルギーを失わないかという心配です。取り越し苦労であることを祈ります。

今私の胸に去来するのは、結局、津田で会った様々な教職員と学生の顔、顔。そのあたたかさが私の中ではいつまでも続きますが、保守的な競争社会の大波に埋没してしまわないよう希望します。



事務局付専門員
(法人業務担当)
渡邊 久美子 氏

時の経過は早いもので、今振り返ると、四半世紀以上の歳月を津田で過ごしたことになります。その間やり甲斐のある仕事を沢山させて頂きました。手始めに、国の政策で学生交換留学奨学金制度が始まると、これを契機に、津田でも交換留学制度を当時の海外交流委員会の先生方と共に軌道に乗せることができました。また教務課で語学研修プログラムが授業の一環として開始され、その仕事にも従事しましたが、いずれの制度もその後いっそう発展し、現在では国際センターに引き継がれていますことは喜ばしいことです。当時は協定校とのやり取りは手紙で2～3週間かかったものですが、国際電話ファックスが普及し、じきにインターネットによるe-mailが使えるようになると、その日のメールに翌朝には返事が返って来るといった、コミュニケーション速度の大幅な改善に感動したりしたものです。

1990年代には大学設置基準の大綱化を受け、高等教育の規制緩和、生涯学習体系社会に対応する津田の教育改革の最前線を、大学院業務に携わることにより体験しました。その前後には、創立90周年記念事業の「写真集」や創立100周年記念事業「津田塾大学100年史」の編纂にも携わりましたが、これは10年ごとにしかできない貴重な経験の一つでした。この他にも、様々な業務に携わり、仕事への充実感を得ることができました。

少子化に伴う大学の質の低下が懸念される昨今、教育の質の維持・向上を目指す津田に改めてよさを感じています。また、学生時代には気づかなかった津田の自然の美しさにも改めて感動したりするこの頃です。皆様お世話になりました。

素晴らしいクリスマス・プレゼント

クリスマス礼拝 (2008年12月10日岡島記念チャペルにて)

小塩 節氏 (ドイツ文学者)

宗教改革者ルターは、ある年のクリスマスに、モミの木の前でボーラ夫人と二人で子どもたちのために自作の歌を聞かせました。「いずこの家にも」(21-246)の賛美歌です。プレゼントはそれだけ。でも楽しくて皆踊り出しました。若かった日のルターがヴィッテンベルク大学に赴任する途中で、スペインからの行商達が歌っているのを聞き覚えていた歌です。後にバッハがクリスマス・オラトリオにも使った曲。

天使と子ども達がかけ合いで歌う形式で、今でも世界中で歌われています。ルター夫妻の歿後、子ども達が言いました。「ぼくらはお金で買ったクリスマス・プレゼントを貰ったことはない。父は教会のご用に印税などを献げ、母はいつもシモヤケ・アカギレの手で苦労していた。でも、モミの木に赤々とともるローソクの火のような、神様への火と、主をたたえる歌を唇に残してくれたことを誇りに思う」と。

こういう子どもに恵まれた親は、本当に幸せだと思います。



▲礼拝の様子

クリスマス献金に心よりお礼申し上げます

総額34,250円のご寄付をいただきました。
この献金は特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパンに
寄付し、紛争等緊急時の支援活動に捧げます。



津田梅子記念交流館プログラム

申込
必要

津田梅子記念交流館事務局 ☎042-342-5146まで

〈会場：小平キャンパス〉

「こころとからだのリラクゼーション～ストレスとの上手なつきあい方～」

- 講師：坂上 頼子氏（臨床心理士）
- 日時：2009年4月24日、5月15日、29日、6月12日、19日（金） 全5回 10:00～12:00
- 参加費：10,000円

「オイリュミーで学ぶチームの力～出会いから対立へ、対立から創造へ～」

- 講師：樋原 裕子氏（オイリュミスト）
- 日時：2009年4月27日、5月11日、18日、25日、6月1日、8日、15日、22日（月） 全8回 10:30～12:30
- 参加費：16,000円

「アートセラピーの体験」

- 講師：加藤 庸子氏（精神保健福祉士）
- 日時：2009年5月13日、20日、27日、6月3日、10日、17日、7月1日、8日（水） 全8回 10:00～12:00
- 参加費：16,000円、別途材料費：2,000円

「自分も相手も大切にコミュニケーション～きもちや考えを伝えよう・受け取ろう」

- 講師：岩井 美代子氏（精神保健福祉士）
- 日時：2009年5月27日、6月3日、10日、17日、24日（水） 全5回 10:00～12:00
- 参加費：10,000円

「あなたの創造性を開くクリエイティブ・ペイティングー花は画家に何を教えているのでしょうか？」

- 講師：ダニエル・モロー氏（画家・ゲート科学研究者）※通訳付
- 日時：2009年6月7日（日） 10:00～16:00
- 参加費：4,000円、別途材料費：500円

ウェルネス・センター公開講座

申込
必要

無料

ウェルネス・センター ☎042-342-5147まで

〈会場：小平キャンパス〉

2009年度も『食』を考える』をテーマに公開講座を開催いたします。
詳細が決まり次第、本学ホームページ等でご案内いたします。

公開講座『総合2009』

申込
不要

無料

教務課 ☎042-342-5130まで

〈会場：小平キャンパス〉

現代の切実な問題を取り上げ、学生が主体となり教員と協力して運営にあたる「総合」。
昨年度の「あらはす一表・現・顕一」に続き、今年度は「境に立つ」をテーマに、各界でご活躍の方々に講演をいただきます。

- 日時：授業期間中の毎週木曜日 13:00～14:30 講演予定者については、本学ホームページをご参照ください。

2009年度オープンキャンパス

開催日程が決定いたしました。お知り合いの高校生や、高校の先生にぜひお勧めください。

- 日時：2009年 ※6月13日（土）、※7月11日（土）、8月9日（日）、15日（土）、16日（日）、※9月19日（土）、※10月10日（土）、
2010年 3月27日（土）（※キャンパスツアーのみ）

[各回の詳細は大学ホームページで随時ご案内します]

今年度も日本各地の学外進学相談会に参加します。

- （実施予定地） ●札幌 ●仙台 ●福島 ●郡山 ●高崎 ●宇都宮 ●新潟 ●東京 ●千葉 ●大宮 ●横浜 ●松本
●甲府 ●沼津 ●静岡 ●名古屋 ●大阪 ●岡山 ●広島 ●福岡 ●那覇

第10回津田塾大学高校生エッセー・コンテスト

国境を越えて広がる「世界市民」のメッセージ 21世紀のネットロア「100人の村（住人）」に手紙を書こう

絵本「世界がもし100人の村だったら 総集編」を読んで、あなたの心には、どんな「村」の風景が広がったでしょうか。あなたの思いを、「100人の村（住人）」あての手紙という形式で書いてみてください。高校生であれば、国籍・学年・性別は問いません。

●パンフレット申込先・お問い合わせ先

津田塾大学高校生エッセー・コンテスト係（企画広報課内）TEL：042（342）5113 e-mail：essaycon@tsuda.ac.jp

※大学ホームページで第1回～第9回高校生エッセー・コンテスト選考結果等を掲載しています。